田中朋弘著
『文脈としての規範倫理学』
（ナカニシヤ出版、2012年）

安　彦　一　恵

最初にこの本を手に取ったとき、タイトルの「文脈としての」というところがまず目に留った。近年、特に若手・中堅の研究者間で競争も激しく、かつてに比べて博士論文などがすぐ著書として出版される傾向に在る。したがって、多くの倫理学研究書が世に出廻っているのだが、そうしたなかで差別化を図って考えて付けられたのだなと思った。同じ出版社から『倫理学の地図』というタイトルの書も刊行されているが、そういえば最近このようにタイトルに凝るものが目立つとも思った。

しかし本書を紐解いてすぐ、「文脈」というのは著者にとって（単なるレトリカルな表現ではなく）基軸となる概念であることが分かった。本書は内容的に見れば「（規範）倫理学史」の概説書である。ひところは、こうした「倫理学史」本は何人か個別思想家の専門研究者が集まって共著として出版されるのが大体であった。著者はこれをお一人でやられている。しかし、単独で「学説史」を書くとなるとどうまとめるか結構悩むところである。そう推測されるが、著者は、これを「文脈」設定としてクリアされているのである。

本論では、主要な「規範倫理学説」が思想家別に紹介されている。著者は、これにご自身で整理枠組みを設定し、そのもとで多くの学説を紹介している。（内容紹介として列挙しておくが、目次からはサルトル、カント、ロス、ロールズ、ベンサム、スマート、ハロッド、ブラント、ヘア、アンスコム、アリストテレス、フット、マッキンタイア、メイヤロフ、コールバーグ、ギリガン、ノディングズの名が拾える。）「文脈」とは、この「整理枠組み」によって設定されてくる「緩やかなストーリー」（i）のことである。

「序論」では、この「枠組み」自身がまず論じられている。これが本書の“売り”となっているところであるとも思える。それは、義務論対目的論・帰結主義といった「既存」のものを踏まえながらも、それに「適用の観点」「認識の観点」という分類枠組み、および、「行為や規範などの正しさや善さに関わる理論」「生き方の理想に関わる理論」という「道徳性の対象という観点を踏まえた」分類枠組み（等）を追加設定したものである。

最後に、評者の“ノルマ”として批判的コメントを一つだけ述べる。「枠組み」が精緻化されているのだが、それに従って、先の各思想家の学説はそれぞれその精緻化された枠組みの代表者として記述されている。しかしそれは、各学説を切り詰めることになっていないであろうか（著者自身「若干の無理」とも言われている（xv））。思想家自身はいわば全体者であって、決して特定の「枠組み」の代表者といったものとして自己規定しているわけではないと考えられるからである。そうであるなら、これは個別学説研究者からは認められないことであろう。ここはむしろ、各思想家の学説をそれぞれにまとめて提示するということ―この部分は、特に初学者にとって有用なものなのだが―をむしろ断念して、つまり「学説史」的アプローチ（の部分）を放棄して、“売り”の部分を生かしていわば「倫理学原論」といったスタイルを採るべきだったのではなかろうか。或る箇所では「「普通の」倫理的判断は、時に対立したり、矛盾したりすることがある」として、そこに「倫理学」の必要性が出てくるとも語られている（iiif.）。たとえばこの認識に定位して、「倫理学史」ならぬまさに「倫理学」として、「枠組み」を―諸学説の関連づけ（「ストーリー」）のための方法的装置としてではなく―そのものとして（たとえば、「義務論」「帰結主義」という対比がなぜなされたのか、それは有効なものか、「正・善」と「生き方の理想」という定位点の差異は「倫理」にとってどういう意味をもつのか、というかたちで）論ずるという途も在ったのではなかろうか。